

平成 2 9 年 6 月 8 日現在

機関番号：1 0 1 0 2

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：2 5 7 7 0 1 9 9

研究課題名(和文)日本の文脈が関わるL2WTCの発達と変動 - 生態学的理解に向けて

研究課題名(英文)Toward an ecological understanding of the development and changes of L2 WTC in the Japanese context

研究代表者

菅原 健太 (SUGAWARA, Kenta)

北海道教育大学・教育学部・講師

研究者番号：2 0 6 3 5 8 3 3

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本人英語学習者を対象に、第二言語(L2)で自発的にコミュニケーションを図る意志(willingness to communicate: WTC)の発達と変動を生態学的システム理論の視点から理解することを目指した。そのため、主に日本人学生から収集した量的・質的データを分析した。結果の考察から、対象者の英語の使用を促す場面状況と、英語使用者としての将来像が育つ環境条件を一部提示できた。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to understand the development and changes of a second language (L2) willingness to communicate (WTC) among Japanese learners of English from an ecological systems theory's perspective. For this objective, I collected both quantitative and qualitative data from Japanese university students. From the interpretations of the results, this study clarified the students' situational contexts in which their willingness to use English was promoted and the ecological conditions that led to the development of their future self-image as an English user.

研究分野：第二言語習得論・言語学習心理学

キーワード：L2 WTC L2モチベーション 生態学的発達論 L2自己システム 日本人青年期層 英語教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 第二言語習得(SLA)研究の学習者要因論の分野では、90年代後半から、第二言語(L2)で「自発的にコミュニケーションを図る意志」(willingness to communicate: WTC)をL2の習得に強く関わる要因として認め、多くの研究が行われてきた。L2 WTC研究の初期段階では、L2 WTCへ影響を与える要因の特定を目的とした実証的研究が行われた。これらの研究をもとにL2 WTCの包括的な概念モデル(MacIntyre, Clément, Dörnyei, & Noels, 1998)が考案された。このモデルには、L2 WTCの先行要因として、会話の相手により変化するL2コミュニケーションへの自信や意欲といった状況的要因から、目標言語を話す人々への態度や接触動機などの個人内で変化しにくい要因、さらには民族間の関係などの社会要因が含まれている。

(2) (1)の研究をもとに、特定の文化圏や学習環境の特色を反映したL2 WTCモデルの構築を目的とした研究が行われた。これらの研究では、個人の性質としてのL2 WTC(特性的L2 WTC)とL2学習の意欲に関わる社会心理要因の関係の検証に向けて、主に質問紙データを用いた量的研究が行われた。一方で、2000年半ば以降、特定の会話文脈などを対象に、対人相手や場の状況により変化するL2 WTC(状態的L2 WTC)を捉えようとした質的研究も行われるようになった。

(3) (2)の状態的L2 WTCを追った研究にも一部反映されている通り、2000年代半ば以降、SLA研究の中で、ダイナミックシステム理論(dynamic systems theory: DST)の視点から、個別の学習者に起こるL2の発達や変化に注目が集まった。この背景を踏まえ、学習者要因論の分野でも、自己概念の変化とその変化を導く環境の特色の理解に向けた研究の重要性が指摘された。特に、Dörnyei(2005)による「L2動機づけ自己システム」(L2 motivational self system: L2 MSS)の提唱後、この理論枠組みをもとに、L2モチベーションの理解を目的とした研究が盛んに行われた。しかし、L2使用者としての自己概念そのものが長期にわたるL2学習経験を通じて形成される複雑なものであり、また、その学習経験を捉える研究方法の開発にも時間を要したため、DSTの視点からL2モチベーションの変化を追った実証的研究は、本研究課題に着手した当時は数少なかった。

(4) (3)の状況から、L2 WTCの研究領域でも、まずは、L2学習者の文脈や発達の環境に着目した研究を行い、徐々にDSTを用いて、L2 WTCの変化や、L2を使用する場面の接近・回避動機理解に向けた実証的研究を目指す動きがみられた。中でも、MacIntyre, Burns, & Jessome(2011)では、カナダでイメージン学校に通う生徒のフランス語で話したい・話

したくない「相反する感情」(ambivalence)が起こる心理プロセスについて、L2 WTC理論とL2 MSSをもとに、彼(女)らのフランス語を話す文脈の特徴や変化から説明した。また、Peng & Woodrow(2010)では、生態学的視点から、外国語としての英語(EFL)を学ぶ中国人学生のL2 WTCについて、教室内環境や信念を含めてモデル化し、構造方程式モデリングで検証した。この研究に続き、Peng(2012)では、Bronfenbrenner(1979)の生態学的発達論をもとに、中国人EFL学習者のL2 WTCの発達を促す教室内・外に根づく環境要因の抽出を目指した。

(5) (4)の研究のように、L2 WTCを促す・妨げる場面状況や環境条件の理解に向けて、日本人EFL学習者を対象に実施した実証的研究は、本研究課題に着手した当時は数少なかった。また、数多く存在する日本人生徒・学生の英語学習に対する動機の減退についての研究や、英語を使用する場面を避ける「内向き志向」などの社会問題にある通り、彼(女)らに英語使用者としての将来像を鮮明かつ具体的に描かせ、英語学習を動機づける方法を提供できる研究が求められていた。以上のことから、下記の研究の目的が浮上した。

2. 研究の目的

本研究では、日本のEFL環境で英語を学ぶ日本人青年期層を対象に、L2 WTCの形成・変動メカニズムを生態学的発達論とL2 MSSの枠組みから明らかにすることを目的とした。そのために、日本人生徒・学生から収集した複合的データの分析を通じて、L2 WTCの発達・変動に関わる現象の概念モデル化を進めた。この概念モデルをもとに、本研究では、対象者のL2 WTCに影響を与えるL2可能自己(英語使用者としての将来像)とL2現実自己(英語使用者としての実際の自分)の不一致、及び、これらのL2自己の形成に関わる現在・過去の英語学習経験について考察し、L2 WTCの発達と瞬時の変化が起こる仕組みの理解を目指した。この考察を踏まえ、対象者層の英語学習におけるモチベーション力を促す場面状況や環境条件の提示を目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者は、本研究課題の申請時に、初年度の研究計画の遂行に向けて、特性的L2 WTCの形成を促す心理プロセスの理解のために、日本人高校生・大学生への質問紙調査を一部実施した。その質問紙には、「教室内的L2 WTC」、「教室外でのL2 WTC」、「教室内的での英語学習不安」、「教室外での英語使用不安」、「英語学習動機の強さ」、「英語使用者としてのL2可能自己」、「国際的文脈への態度」、「英語力に関わる自己不一致」を測る質問項目を含めた。研究代表者は、これらの項目から成る各心理尺度の信頼性・妥当性を検証した。続いて、特性的L2 WTCを促す・妨げる

心理プロセスをそれぞれモデル化した。その後、研究対象者から収集したデータを用いて SPSS Statistics 22.0 にデータを投入し、相関分析を行った。その結果をもとに、Amos 22.0 にデータを変換し、パス解析や構造方程式モデリングの手続に沿って統計的因果推論による仮説検証を行い、結果を解釈した。

(2) (1)の研究と同時に、研究代表者は、日本人学生の状況的 L2 WTC の変化に関わる文脈と、L2 可能自己の発達条件の明確化を目的とした研究計画を遂行した。そのために、まずは、生態学的発達論と DST の理解に向けて文献レビューを実施した。続いて、上記の理論を用いた L2 WTC・L2 モチベーション領域の実証的研究をレビューし、本研究における研究方法を具体化した。それを踏まえ、研究対象者から英語学習経験を含んだ質的データを収集した。収集したデータを NVIVO 10 を活用し、グラウンデッドセオリー開発の技法と手続(Strauss & Corbin, 1998)に沿って概念モデル化した。この分析結果を DST と生態学的発達論を用いて解釈し、対象者層の英語使用者としての将来像を具体化・鮮明化して英語学習を動機づける環境条件を提示した。

4. 研究成果

(1) 日本人青年期層の特性的 L2 WTC を促す心理プロセスについて、教室外での L2 WTC を基準変数とし、教室内での L2 WTC、英語使用者としての L2 可能自己の 3 要素(実現可能性、活性化の頻度、望む気持ちの強さ)、英語不安、英語学習動機の強さ、そして、国際的環境への態度で構成した仮説モデルが、大学生データと高校生データを用いてパス解析で検証したところ、概ね支持された。しかし、大学生データと高校生データの間には、違いも確認できた。例えば、大学生データでは、L2 可能自己の実現可能性から教室外での L2 WTC へのパスが支持されたが、高校生データでは、支持されなかった。また、大学生の方が、高校生よりも、英語不安から実現可能性への負の影響力が強かった。この結果から、大学生の方が、教室外での文脈的視点から、L2 可能自己を意識でき、その実現可能性により L2 WTC の強さが決まることが示された。なお、本研究成果をまとめた論文が、*JACET Journal*, 57 に掲載された(Sugawara et al., 2013)。

(2) (1)に続き、日本人青年期層の特性的 L2 WTC を妨げる心理プロセスの理解に向けて、先行研究のレビューから、対象者の文脈と自己不一致に注目し、教室内と教室外での英語使用場面における仮説モデルを構築した。そのモデルは、教室内/教室外での L2 WTC、現在の英語力、英語使用者としての L2 可能自己、教室内/教室外での英語不安、英語学習動機の強さ、そして、英語力に関わる義務自

己と現実自己の不一致で構成した。大学生から収集したデータを用いて、そのモデルを構造方程式モデリングにより検証した結果、教室内・外での L2 WTC モデルはともに支持された。一方で、両モデル間に違いも確認できた。例えば、教室外での英語使用不安の方が、教室内での英語学習不安よりも、英語学習動機の強さへの負の影響が強く、その動機の強さから L2 WTC への影響力も弱かった。本結果を踏まえ、学習者の英語使用不安を高める自己不一致を軽減し、L2 WTC を高める方法を提示した。本研究成果をまとめた論文は、*ARELE*, 26 に掲載された(Sugawara, 2015)。

(3) L2 WTC 領域の先行研究のレビューに基づき、本研究では、生態学的視点から日本人青年期層の L2 WTC の発達に関わる環境要因の抽出を試みた。その結果、L2 WTC の変化に関わると推測した様々な環境要因が、Bronfenbrenner(1979)の生態学的システムモデルを構成するマイクロシステム、メゾシステム、エクソシステム、そして、マクロシステムの領域に分類でき、L2 WTC 研究におけるこのモデルの有用性を主張した。さらに、マイクロシステムを構成する発達の原理「N+2 システム」をもとに、L2 自己の発達を促す二者間の共同的活動や、それを支える第三者の存在に注目することで、L2 WTC 研究の進展が見込めることを主張した(詳細は、「函館英文学」第 54 号(菅原, 2015)を参照のこと)。

(4) L2 WTC 研究と L2 モチベーション研究のレビューをもとに、両領域のインターフェイスを探り、今後の研究で注目すべき面を明確にした。L2 モチベーションの研究領域では、今後も L2 MSS や DST の視点から L2 モチベーションの変化の理解に向けた研究が行われる可能性を主張した。また、L2 WTC の研究は、L2 モチベーションの研究に影響を受けて行われてきた背景から、その変化に注目した研究が行われるであろうが、徐々に、L2 コミュニケーションへの接近・回避動機に関わる現象を扱う領域として、L2 モチベーションの研究分野に組み込まれる可能性を主張した。本研究から、日本人青年期層の英語使用への接近・回避動機の理論化を通じて、英語学習動機の減退から脱却を促す実践方法を提示できる根拠を提示した(詳細は、「函館英文学」第 55 号(菅原, 2016)を参照のこと)。

(5) (1)-(4)の研究のレビューを通じて、研究代表者は、日本人学生の L2 WTC と L2 UnWTC(自発的にコミュニケーションを図らない意志)の間で揺れ動く心理や、この現象に関わると推測した L2 可能自己が高まる環境条件の理解を目指した。グラウンデッドセオリー開発の技法と手続に沿って日本人学生の L2 学習経験に関わる質的データをカテゴリー化し、DST と生態学的発達論の視点から解釈した。その結果、対象者の L2 WTC と L2 UnWTC が起

こる文脈には、教師、留学生、日本人クラスメート、日本人の友人、バイト先で出会う外国人、家族、友人家族等との英語の使用場面が浮上し、両文脈での小さな変化により、L2 WTC から L2 UnWTC(また、その逆方向)への変化が起こることが明らかになった。また、対象者の L2 可能自己が起こる文脈にも、教師、友人、クラスメート、家族、友人家族との英語の学習場面が浮上し、L2 WTC と L2 UnWTC が起こる文脈との重なりがみられた。それに加え、L2 可能自己を引き出す二者間関係と、それをサポートする第三者の働きかけがカテゴリー化でき、そのカテゴリー間の関係から、マイクロシステム(N+2 システム)の存在を確認した。さらに、L2 可能自己の発達文脈を追う中で、メゾシステム、エクソシステム、マクロシステムが浮上し、この自己の高まりを感じた経験が鮮明であるほど、L2 WTC も高いことが、相関分析により実証された。以上の通り、本研究では、対象者層の L2 WTC が起こる場面状況と L2 可能自己が育つ環境条件の理論化を通じて、彼(女)らの英語学習を動機づける方法を一部提示できた。なお、本研究をまとめた論文が、*ARELE*, 28 に掲載された(Sugawara, 2017a)。

(6) 以上、(1)から(5)の記述通り、研究代表者は、生態学的発達論と DST の視点から、日本人青年期層の L2 WTC の理論化を通じて、彼(女)らの英語学習が動機づく環境条件の一部を学術論文で公表できた。本研究課題から得られた成果を (5)の研究を中心に、L2 WTC と L2 可能自己の相互関係を実証した研究(Sugawara, 2017b)を加えて振り返る中で、今後は、DST と生態学的発達論の組合せ的アプローチを用いて、対象者層の英語学習場面で起こる L2 可能自己の変化をより詳細に理論化することが求められる。特に、本研究では、L2 可能自己や他の L2 MSS の要素の変化を導く統制パラメータの抽出・記述までには至らなかった。この部分を含めた研究計画を立てることで、日本の社会文化圏で形成される L2 MSS と学習環境の特色から起こる実態を反映した L2 モチベーション研究の進展が見込める。

(引用文献)

- Bronfenbrenner, U. (1979). *The Ecology of Human Development: Experiments by Nature and Design*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- MacIntyre, P. D., Burns, C., & Jessome, A. (2011). Ambivalence about communicating in a second language: A qualitative study of French immersion students' willingness to communicate. *Modern Language Journal*, 95, 81-96.
- MacIntyre, P. D., Clément, R., Dörnyei, Z., & Noels, K. A. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. *Modern Language Journal*, 82, 545-562.
- Peng, J. (2012). Towards an ecological understanding of willingness to communicate in EFL classrooms in China. *System*, 40, 203-213.
- Peng, J. & Woodrow, L. J. (2010). Willingness to communicate in English: A model in the Chinese EFL classroom context. *Language Learning*, 60, 834-876.
- Strauss, A., & Corbin, J. (1998). *Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory* (2nd ed.). Oaks, CA: Sage.
5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)
- [雑誌論文](計 6 件)
- Sugawara, K. (2017a). Toward an ecological systems understanding of motivational dynamics among Japanese learners of English. *ARELE: Annual Review of English Language Education in Japan*, 28, 65-80. [査読有]
- Sugawara, K. (2017b). Willingness to communicate and possible selves among Japanese learners of English. *Journal of the English Literary Society of Hakodate*, 56, 147-160. [査読有]
- 菅原 健太. (2016). L2 モチベーションと L2 で自発的にコミュニケーションを図る意志のインターフェイス. 「函館英文学」第 55 号, 107-127. [査読有]
- 菅原 健太. (2015). 日本人青年期層の英語で自発的にコミュニケーションを図る意志の生態学的理解に向けて. 「函館英文学」第 54 号, 69-81. [査読有]
- Sugawara, K. (2015). Willingness to communicate and self-discrepancy among Japanese learners of English. *ARELE: Annual Review of English Language Education in Japan*, 26, 13-28. [査読有]
- Sugawara, K., Sano, A., Kawai, Y., Yokoyama, Y., Nakamura, K., & Mitsugi, M. (2013). Influences of international attitudes and possible selves on willingness to communicate in English: A comparative analysis of models for Japanese high school and university learners of English. *JACET*

[学会発表](計 5 件)

Sugawara, K. An exploratory study of Japanese students' willingness to communicate in English from an ecological perspective. 13th Asia TEFL International Conference. 2015 年 11 月 7 日, Nanjing, China.

菅原 健太. 第二言語で自発的にコミュニケーションを図る意志の生態学的理解に向けて. 函館人文学会 2014 年度例会大会、2014 年 12 月 5 日、北海道函館市.

菅原 健太、横山 吉樹、河合 靖、中村 香 恵子、佐野 愛子. 英語で自発的にコミュニケーションを図る意志と自己不一致 生態学的理解に向けて. 第 40 回全国英語教育学会 徳島研究大会、2014 年 8 月 9 日、徳島県徳島市.

菅原 健太. 英語で自発的にコミュニケーションを図る意志の発達過程 生態学的理解に向けて. 平成 26 年度 函館英語英文学会 研究発表会、2014 年 6 月 14 日、北海道函館市.

菅原 健太. 生態学的発達論から国際教養教育における英語教育実践の発展に向けて. 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 研究セミナー 2013 年 11 月 28 日、北海道札幌市.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅原 健太 (SUGAWARA, Kenta)
北海道教育大学・教育学部・講師
研究者番号: 20635833